

ユーラシアの地政学としてのソヴィエト建築学

——モスクワ、ノヴゴロド、北京

池田嘉郎

はじめに

「過去の芸術作品は、さまざまに異なる社会条件の下で生み出されてきた。物質文化における記念碑や、芸術上の記念碑がもっている形態や用途には、そうした社会条件の違いがはっきりと刻印されている。だが、人民 народ は常に、それらの記念碑や、何よりもまず建築家の手になるモニュメンタルな作品のなかに、その用途のいかんによらず、みずからの文化や芸術を表現してきたのであるし、おのれの歴史における偉大な出来事を、石

のなかに刻みつけてきたのである」(Рязнин 1947: 5)。^{*1}

これは、第二次大戦後の一九四七年にソ連建築アカデミー出版所で刊行された、芸術職業学校の教科書の一節である。スターリン時代の盛期であるこの時期に、ソ連の建築家たちは、過去の建築物の研究に多くの関心を払っていた。そうした過去の建築物とは、何よりもまず「民族的」なものであった。同じ教科書によれば、「ソ連のそれぞれの民族 народ は、新しいものを創造する中で、不可避的にみずからの民族的な национальный 過去に向き合っている」(Рязнин 1947: 5)。^{*2}

この引用に示唆されているように、スターリン時代のあ

る時期以降、ソ連建築学界においては、建築における「民族的なもの」の探求が、ユーラシア規模で展開された。ユーラシア規模というのは、第一に、そうした探求においては、広大なソ連に暮らす諸民族のそれぞれが、主体的な参加者となったからである。第二に、そうした探求においては、ロシアとその近接地域（とりわけヨーロッパやビザンツ）の相互関係が問われたからである。第三に、ソ連で提起された問題関心が、国境を越えて社会主義圏に波及し、とりわけ中国において大きな反響を呼んだからである。

広大な大陸に暮らす諸民族の關係が、歴史や文化の次元で問われたという意味で、ソヴィエト建築学には、いわばユーラシアの地政学という側面があった。本稿の目的は、スターリン時代のソ連建築学界における、ユーラシア規模での「民族的なもの」の探求が、いかなる背景をもっていたのかを検討することにある。とりわけ三つの局面から光を当てることで、ソ連建築学界における「民族的なもの」の探求が、どのように展開したのかを浮かび上がらせたい。第I章で取り上げるモスクワの全連邦農業博覧会は、ソ連の諸共和国に生きる人々にとって、「民族的なもの」とは何かという問題が、建築の分野で問われた出来事であった。第II章で取り上げるノヴゴロドの復興は、諸民族のうちに、とくにロシア人にとって、建築上の伝統や、それに対する近接地域の影響が問われた出来事であった。第III章で取り

上げる北京改造は、中国都市史上の文脈とは別に、ソ連建築学界で提起された問題が、国境を越えて波及していくひとつの事例となった。ただし、本稿では第I章における分析を中心とし、第II章、第III章の分析は概観に留める。

ソ連建築学の研究史では、一九二〇年代の百花繚乱状態を高く評価し、その後が生じた、スターリン指導部とその意を受けた建築家による公定スタイルの押し付けを悲劇として捉えるのが、伝統的な図式である（比較的近年の例として Hudson (1994) 参照）。それに対して近年では、スターリン時代の建築様式や建築家の探求を、固有の価値をもつものとして捉え直す動きが見られる（最も重要なものは Паперный (1996)）。

本稿もまた、スターリン時代の建築学の探求を内在的に捉えようとする点で、近年の研究動向と視角を共有する。ここで本稿の結論を前もって示すならば、スターリン時代のソ連建築学界における「民族的なもの」の探求は、建築学界、さらにはソ連政治全体における独自の志向性によって、一貫して導かれていた。その志向性とは、「大きな政治」の枠を超えて、住民の日常生活のありように強い関心をもつ、ということである。スターリン時代の政治は、テロルとイデオロギー統制によって特徴づけられていたが、その反面において、人々の日常生活を「楽しく、豊かに」しようとする志向も強力に存在していた (Gronow 2003)。

建築学界における「民族的なもの」の探求もまた、そうした生活の現場、生活の実態に対する建築家と政治家の関心によって、強く後押しされていたのである。

I モスクワの全連邦農業博覧会

建築という観点から見たとき、一九三〇年代前半のモスクワの基調は破壊であった。救世主キリスト大聖堂や「キタイゴロドの壁」の破壊が、典型的な事例である。ついで、三〇年代半ばにはモスクワ全体の改造が始まった。新たな建物の建設や、新たな様式の創造が活発に繰り広げられた(池田 2009; 2010)。だが、三〇年代も終わりに近づくと、新たな動向がモスクワの建築に表れるようになった。それは、建築における「民族的なもの」への関心である。とくに一九三九年に開かれた全連邦農業博覧会では、その動向が顕著に示された。

1 全連邦農業博覧会と社会統合

全ソ連規模の農業博覧会をモスクワで開催するという案は、一九三五年二月の第二回全連邦コルホーズ突撃作業員大会で提起された。政府はただちにこれを承認し、

一九三七年八月一日を開会日と定めた(Выставочные 2006: 153)。その後、一九三七年―一九三八年の大テロルにおける責任者の逮捕と工事のやり直しもあり、博覧会の開会是一九三九年にまでずれ込んだ(Паперный 1996: 196)。それでも八月一日の開会式にはモロトフ首相を筆頭に政府高官が顔をそろえ、「コルホーズ体制の偉大な勝利」の博覧会を祝った。このときモロトフが述べたように、結果的には全連邦農業博覧会は、一九二九年秋に始まる全面的農業集団化の一〇周年を画するものとなった(Ирариа 1939 Август 2: 1)。^{*}

農業集団化の一〇周年というのはあとづけであったにしても、一九二〇年代末以降の「社会主義建設」のひとつの総決算として、全連邦農業博覧会が位置づけられていたことはたしかである。だが、そうした博覧会のテーマが「工業」ではなく「農業」であったのは、なぜなのであろうか。一九二三年の全ロシア農業・クスタリ工業博覧会や帝政期の農業博覧会のような先行企画があったにしても、それだけでは十分な説明にはならない。ここではむしろ、住民の大多数を占める農民を体制に統合しようとする、政権の努力について考えるべきであろう。とりわけ一九三六年一二月に採択されたスターリン憲法は、農民よりも労働者に有利であった従来の代議員選出基準を廃止することで、農民の体制統合に大きな意欲を示したのであった。全連邦

農業博覧会もまた、同様の狙いをもっていたと考えることができる。博覧会の一パンフレットには、こう記されていた。「スターリン憲法の太陽の下、偉大なソヴィエト人民は誰もが皆、世界で最も民主的な権利を享受し、コルホーズの畑、創造的な労働と文化が富み栄え、私たちの生活は楽しく豊かなものとなりつつある」(Жуков 1939: 5)。

農民の統合は、多民族国家ソ連ではとりわけ重要な課題となった。いわゆる民族共和国では、経済における農業の比重が、R S F S R (ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国) よりも遥かに高かったからである。各地における農民の「楽しく豊かな」生活を伝え、コルホーズ化された農業の成果を称揚する。まさにそのために建てられたのが、全連邦農業博覧会の諸共和国パヴィリオンなのである。

一九三九年八月の時点で、全連邦農業博覧会には、R S F S Rをのぞく一〇共和国のパヴィリオンが建てられていた。R S F S Rは、州や地域単位の九のパヴィリオンによって代表された。さらに、R S F S R

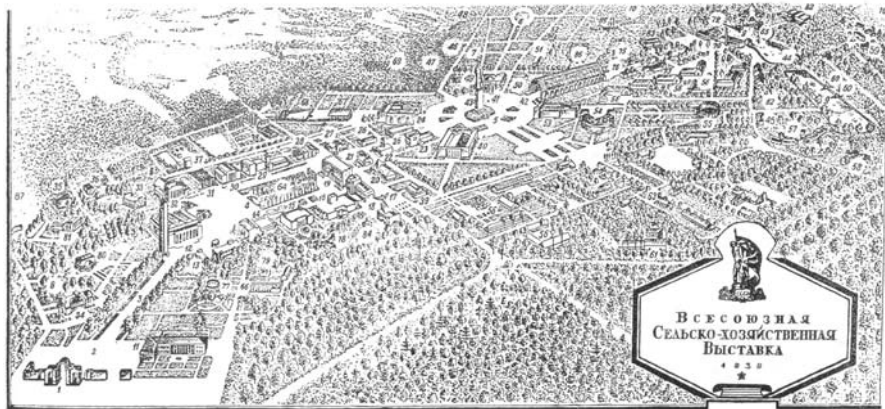


図1 1939年全連邦農業博覧会基本構想

- | | | | |
|------------------------------|------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1. 正門 | 21. トルクメニスタン・パヴィリオン | 44. 水力発電所 | 66. 第1映画館 |
| 2. 受付広場 | 22. バシキリア・パヴィリオン | 45. 養蚕パヴィリオン | 67. 第2映画館 |
| 3. 大並木道 | 23. 中央諸州パヴィリオン | 46. 園芸パヴィリオン | 68. 軽演劇場 |
| 4. コルホーズ広場 | 24. 北カフカースとクリミア・パヴィリオン | 47. 野菜栽培パヴィリオン | 69. 緑の劇場 |
| 5. 機械化広場 | 25. キルギスタン・パヴィリオン | 48. 葡萄栽培とワイン醸造パヴィリオン | 70. ビール・パヴィリオン |
| 6. ミチューリン農法実証 | 26. タタルスタン・パヴィリオン | 49. 甜菜パヴィリオン | 71. アイスクリーム・パヴィリオン |
| 7. 露地栽培地 | 27. タジキスタン・パヴィリオン | 50. 亜麻・麻・新繊維作物パヴィリオン | 72. リキニール・パヴィリオン |
| 8. 「若い自然学者」ゾーン | 28. ペラルーシ・パヴィリオン | 51. 採油植物と薬用植物パヴィリオン | 73. 食肉パヴィリオン |
| 9. 池 | 29. 沿ヴォルガ・パヴィリオン | 52. 工芸作物と薬用植物パヴィリオン | 74. 缶詰食品パヴィリオン |
| 10. 休息ゾーン「ジェルジンスキー名称文化公園」 | 30. アゼルバイジャン・パヴィリオン | 53. 畜産パヴィリオン | 75. 茶・菓子パヴィリオン |
| 11. 展示会本部 | 31. アルメニア・パヴィリオン | 54. 眼医学パヴィリオンと人工授精パヴィリオン | 76. 雑草パヴィリオン |
| 12. メインパヴィリオン | 32. カザフスタン・パヴィリオン | 55. 馬場 | 77. チャイハナ(中央アジアの茶店) |
| 13. カズベキスタン・パヴィリオン | 33. カザフスタン・パヴィリオン | 56. 家畜飼育場 | 78. カフェ |
| 14. 極東パヴィリオン | 34. 「若い自然学者」パヴィリオン | 57. 大種改良パヴィリオン | 79. 東洋料理レストラン |
| 15. シベリア・パヴィリオン | 35. 出版パヴィリオン | 58. 狩猟と毛皮飼育パヴィリオン | 80. 児童用カフェ |
| 16. レニングラードと北東部パヴィリオン | 36. 泥炭パヴィリオン | 59. 養蚕部門 | 81. 第1カフェ |
| 17. ソヴィエト極北パヴィリオン | 37. 石油パヴィリオン | 60. 魚養殖部門 | 82. 大レストラン |
| 18. モスクワ州・トゥーラ州・リャザン州パヴィリオン | 38. 農業森林土地改良パヴィリオン | 61. 動物病院 | 83. 軽食堂 |
| 19. ウクライナ・パヴィリオン | 39. 砂糖工場 | 62. 養蚕パヴィリオン | 84. パバーニン隊の野営テント |
| 20. クルスク州・ヴォロネジ州・タンボフ州パヴィリオン | 40. 穀物パヴィリオン | 63. 「農村における新しいもの」部門 | 85. 養蜂パヴィリオン |
| | 41. 綿花パヴィリオン | 64. コルホーズ広場の噴水 | 86. 亜熱帯物産温室 |
| | 42. 機械化パヴィリオン | 65. 池畔の「笑いの礎」の噴水 | 87. サーカス |
| | 43. 同志スターリン記念碑 | | |

(出典) Жуков 1939.

の二つの自治共和国（タートルスタン、バシキリア）が、独自のパヴィリオンをもつことができた（図1を参照せよ）。

2 民族的な形象

共和国パヴィリオンに関して建築家や批評家が最も重視したのは、いかにしてそれに「民族的な形象」（национальный образ）を与えるかということであった。パヴィリオンという箱自体は展示空間の連なりにすぎず、特殊「民族的」な展示空間というものがあるわけではない。だが、それだけに建築家たちは、パヴィリオンの「形象」にこだわった（図2を参照せよ）。

たとえばタール自治共和国パヴィリオンの建築家ガイヌトジノフは、グルジアのパヴィリオン（建築家はクルジアニとレジャヴァ）について、次のように記した。「複合柱は、装飾加工のモチーフとしては、これまでも民族的な建築において用いられているのだが、ここでは支柱として用いられており、パヴィリオン型の建物の性格に完全に合致している」。また、アゼルバイジャンのパヴィリオン（建築家はウセイノフとダダシエフ）の「シンメトリックに構成された建物には、記念碑的な、大理石張りの正面玄関がある。それはアゼルバイジャンの建築遺産の色調をみごと

に伝えている」（[Айнутинов 1939: 4, 5]）。ウズベキスタンのパヴィリオン（建築家はボルバノフ）では、展示空間としてのパヴィリオンと、民族的な形象のコントラストはとくに目をひいた。彫刻家ラビノヴィチは次のように記している。

「単純な『П』の字型」の構想により、中心ホールと脇側の二つの展示ホールが整然と結びつけられている（……）。おそらくこの立体構成は、いかなる特殊民族的な特徴も有していない。それは、パヴィリオン型のどんな現代建築に対してもわれわれが求めるであろう要請に、完全に応えている。それにもかかわらず、パヴィリオンの形象は深く民族的なのである（強調は原文）（……）。小さな奥まったいくつかの入り口となめらかな壁とのこの結びつきは、粘土に切藁・砂・小石などをこねて作った壁『ドゥヴァル』をすぐさま想起させる（……）。絨毯模様の中庭は、噴水やあずまやと一緒に、伝統的なウズベクの小さな中庭に見るものを誘うかのようである」（[Рабинович 1939: 9-10]）。

民族的な形象に対するこの関心は、何を意味するのであろうか。モニカ・リュートアースは、全連邦農業博覧会を「ヴァーチャル・ツーリズム」の場として捉え、首都と「植

民地」のヒエラルキーの反映としてその展示内容を理解している (Porepc 2006: 214)。そうした植民地主義的な視角が、全連邦農業博覧会、またソ連「帝国」の政治全般に見られたことはたしかである。だが、そのような視角を前提としながらも、全連邦農業博覧会において建築家や政治家が追求していたのは、帝國的なヒエラルキーの再確認ばかりではなかった。また、グレッグ・カステイロは、非ロシア系民族出身の建築家自身が、民族表象を用いた差異化の政治に主体的に関与したことを明らかにしているが、そもそもなぜ、「民族」の表象がスターリン時代の建築、また文化一般において重要性を増すのかについては、十分に論じられてはいない (Castillo 1997)。この問題を掘り下げるために、ラビノヴィチの文章をさらに見てみよう。「ウズベキスタンの」パヴィリオン³の基本的な形象は、住居の形象であつて、崇拜用の建物〔宗教建築物〕の形象ではない。ウズベキスタンのパヴィリオンは、ある程度までは、ウズベクの人民的な家屋⁴邸宅の原型となりうるものである。それは喜びに満ちた将来の家屋である。その性格から言つて公共的であるはずの建物に、住居ならではの親密さが感じられるのだ」 (Рабинович 1939: 11)。

ここにある、パヴィリオンは人民的な家屋の原型となりうるという指摘は、共和国パヴィリオンの民族的な形象に

ついて考える上で重要である。というのは「家屋」へのこの言及は、住民の日常生活に対する関心が、民族的な形象の根源にあることを窺わせるからである。そもそも全連邦農業博覧会の共和国パヴィリオン（およびその他の生産関連パヴィリオン）の中心的な展示テーマは、農業活動を中心にした、各地の農民・労働者の日常生活であつた。展示ホールにはコルホーズの農民の写真が飾られ、農機具が展示され、農作物が陳列された。⁴もとよりそれらは現実を著しく美化したファンタジーではあつたが、「大きな政治」よりも日々の生活を重視する視線が、全連邦農業博覧会には一貫して存在していたのである。⁵一九三〇年代末のソ連のコードにおいて、「民族的な形象」とは、各地の人々の生活そのものの形象にはかならなかつた。

住民の日常生活に対する関心は、然るべき建築上の遺産がないと判断された共和国のパヴィリオンで、とくに顕著なものとなつた。タタールスタンの建築家ガイヌストジノフは、自分が建設したパヴィリオンのことも含め、次のように書いている。

「タターリア、バシキリア、キルギジア、カザフスタンのパヴィリオンについては、とくに記す必要がある。

／これらの民族 народы は、傑出した建築上の遺産をもっていない。そのためパヴィリオンの製作者は、人民

の民族的なフォークロアに頼るしかなかった。これらの民族 *народа* の創造活動における、本質的な形象を探究するなかで、建築家たちは、もっぱら生活用品、クスタール（半農半工の職人）の製品、図柄、装飾、刺繍、彫刻模様、打ち出し模様を学ぶことで靈感を得た。そうして建築のなかに、それらのもつ繊細で、容易には捉えにくい民族的色調を再現しようとしたのである^{*}。

このように記したのち、ガイヌトジノフは次のように結論づけた。「これはタターリア、バシキリア、キルギジア、カザフスタンでの、失われた民族建築復興の複雑な過程における第一歩である」(Гайнутдинов 1939: 6)。したがって、全連邦農業博覧会の共和国パヴィリオンは、ソ連各地の民族エリートにとつても、ネイション・ビルディング——エスニックなものであると同時に、「ソ連の一員になる」という意味では公民的なものでもある——に主体的に参加するため、重要な場なのであった^{*}。

3 ウクライナ、ベラルーシ、RSFSRの パヴィリオン

ここまで引用してきた文章では、もっぱら非スラヴ系の共和国パヴィリオンばかりが触れられていた。では、スラ

ヴ系共和国（ウクライナ、ベラルーシ、RSFSR）のパヴィリオンでは、民族的な形象の探求はどのような状態にあったのだろうか。

ウクライナのパヴィリオン（建築家はターツィー）は、民族的な形象に満ちている点では非スラヴ系のパヴィリオンに近かった^{*7}。当時の案内書によれば、「花咲くソヴィエト・ウクライナのパヴィリオンのファサードは、たわわに実った黄金の小麦の穂、それにパヴィリオンの入り口を縁取る色鮮やかな民族的な装飾によって飾られている」(Всесоюзная 1940: 10)。

ベラルーシのパヴィリオン（建築家はバルヒン、シンビルツェフ）は、より民族的な形象に乏しかった。たしかに壁面の装飾には「ベラルーシの刺繍の柄」が用いられていた(Рабинович 1939: 13)。だが、パヴィリオンに関する同時代人の説明では、ベラルーシは個別の民族共和国である以上に、ソ連全体にとつての軍事的拠点、「西部国境の前哨」であった(Жуков 1939: 22)。それに対応して、パヴィリオンの正面に立つ彫像も「コルホーズ農婦と国境警備隊員」であった(Выставочные 2006: 427)^{*}。

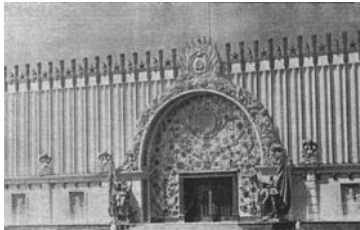
RSFSRの諸パヴィリオンも、民族的な形象はより控え目であった。モスクワ建築学院の教授で建築史家のアルキン^{*8}は、次のように書いている。「民族共和国のパヴィリオンと際立った対照をなすのが、レニングラードと北東部



1. グルジア・パヴィリオン



2. ウズベキスタン・パヴィリオン



3. ウクライナ・パヴィリオン



4. ベラルーシ・パヴィリオン



5. レニングラードと北東部
パヴィリオン。正面に立つの
は暗殺されたレニングラード
の指導者キーロフの像



6. 沿ヴォルガ・パヴィリオン。騎馬像は
内戦の英雄チャバーエフ



7. バシキリア・パヴィリオン（手前）と
トルクメニスタン・パヴィリオン（奥）

図2 全連邦農業博覧会（1939年）のパヴィリオン

（出典）1, 2, 7は Архитектура СССР 10 (1939) より C.6, 10, 13。3～6は Жуков (1939) より C.24, 25, 37, 38。

パヴィリオンだ(……)。このパヴィリオンは、ザカフカースと中央アジアの諸共和国の鮮やかな色彩と豊かな装飾を知らない(……)。パヴィリオンの整然たる拱廊や、その単純で厳格な古典的な輪郭には、レニングラードの建築物の形象がみごとに伝えられている」(Аркин 1939)。

ラビノヴィチも、RSFSRの諸地域のパヴィリオンを他の共和国のものとは区別して語っている。

「われわれはいくつかのパヴィリオンについて語ってきたにすぎないが、残りのすべてのものも民族芸術を活用しており、その要素を構成に取り込んでいる。RSFSRの州と地方のパヴィリオンでさえも〔強調は引用者〕、外観や内装に人民芸術を取り入れている(……)。レニングラードと北東部パヴィリオンの内装では、ホフロマ塗りとキエロフ(ヴァトカ)の玩具のモチーフが広く用いられている」(Рабинович 1939:12-13)。

もとよりこの引用に見られるように、RSFSR諸地域のパヴィリオンにも民族的な形象は取り入れられていた。だが、それらのパヴィリオンの外観・内装においては、民族的な観点よりも、ロシア連邦ないしソ連全体のなかでの経済的・地政学的分業の観点の方が、重要であった。た

たとえば沿ヴォルガ・パヴィリオンのファサードには、クイブイシエフ水力発電所の巨大な絵が描かれていたし、極東パヴィリオンは「不屈の要塞、ソ連防衛の不敗の前哨として、この地方を描き出している」とされた(Жуков 1939: 22, 26) (したがって極東パヴィリオンは、西方の要衝であるベラルーシ・パヴィリオンと対をなした)^{*10}。

RSFSR諸地域(およびベラルーシ)のパヴィリオンが、民族的形象の点でより控え目であった理由は、いくつか考えられる。第一に、それらはRSFSRの諸州・地域のパヴィリオンであって、共和国のパヴィリオンではなかったからである。第二に、RSFSRの諸地域のパヴィリオンは、ソ連全体のなかでの経済的・地政学的役割を具現化していたからである。第三に、ソ連では「ロシア」は、帝国支配という否定的な事象と結びつけて考えられてきたからである。そうしたロシアの歴史や文化について、民族的な観点から肯定的に論じようとする動きは、一九三〇年代末の時点ではまだ緒についたばかりであった^{*12}。

だが、全連邦農業博覧会の開会から二年後、そのような動きを一挙に推し進める出来事が起こった。ナチス・ドイツとの戦争である。

II ノヴゴロド復興

ロシア建築の民族的伝統という問題設定が、ソ連建築学界で確固たる地歩を占めるのは、独ソ戦を経てのことである。モスクワでは一九三四年、旧ドンスコイ修道院にソ連建築アカデミー付属建築博物館が開かれていたが、それとは別にカーリーニン通り（現ヴォズドヴィージェンカ通り）にロシア建築（русская архитектура）博物館が開かれたのは、その端的な現れであった。博物館が置かれた建物はタリジン邸（一七八七年建設）といつて、ロシア古典主義の代表的建築家カザコフ（一七三八―一八一二）の作品であった*。

ロシア建築の民族的伝統に対する関心が戦時中に高まったひとつの理由は、スターリン指導部が帝政期の歴史・文化・宗教の動員力に頼ったからである（Brandenberger 2002: 115-180）。だが、そうした関心の根底にあったのは、日常生活の注視という、戦前のソ連政治にすでに見られた傾向にはかならない。そのような傾向が、ソ連、そしてロシアの日常生活を根底から覆す戦争を経たことによって、ロシアそのものの民族的伝統を問う方向に発展したのである。

ロシア建築の民族的伝統という問題意識が打ち出される上では、一九四六年十一月二五日に開かれた戦後初のソ連建築アカデミー第七会期が重要であった（第六会期は一九四四年七月）。この会議では、今後五年間（一九四六―五〇年）の建築アカデミーの学術活動計画が討議された。基調報告のなかで、建築アカデミー会長のヴィクトル・ヴェスニンは、アカデミーの基本課題のひとつとして、「ロシアの都市建設における民族的伝統について」をあげた。「われらの諸都市の成立の歴史を分析しながら、ロシアの都市建設の進歩的な伝統と、現代の仕事——ノヴゴロドに対するヴェ・ア・シチューセフの仕事、ヴォロネジに対するエリ・ヴェ・ルードネフの仕事（……）——とをひとつに合わせること」が、この基本課題の意味するところであった（Основные 1947: 3; Веснин 1947: 7, 12）。

ロシアの都市建設の伝統を考える際に、最重要都市のひとつとなったのがノヴゴロドである。ロシア北西部に位置するノヴゴロドは、キエフ・ルーシ第二の都であり、一〇世紀につくられたクレムリン（城塞）をはじめ、歴史的な建築物が数多く残っていた。だが、一九四一年八月から一九四四年一月まで、ノヴゴロドはドイツ軍に占領された。住民の一部は逃げ、一部はバルチザンとなった。前線が市を通り、町並みは著しく破壊された。住宅二三四六棟のうち四〇のみが残り、歴史的な建築物も一部損壊した

(Торона 1994: 304-307; Новгородская 2000: 53-54)。

ドイツ軍退却後、ノヴゴロドの復興（責任者はシチューセフ）と、歴史的建築物の調査が、ソ連建築アカデミーの大きな課題となった。建築アカデミーの建築史・理論研究所では、戦時中の一九四四年に「ロシア建築史セクター」がつくられていたが、このセクターがノヴゴロドのクレムリンにあるソフィア大聖堂の調査に当たった。一九四四年秋と四五年秋の短い調査を経て、一九四六年七月から八月に本格的な調査が行われた。

建築アカデミーの第七会期では、建築史・理論研究所のブルノフが報告を行った。調査の大きな課題は、ソフィア大聖堂の原型と、その後の増築による変化を明らかにすることにあつた。その解明の過程は、ユーラシア北西部のノヴゴロドにおける、ロシア、ヨーロッパ、ビザンツの文化的な影響関係を解きほぐし、かつ解釈することにほかならなかった。ブルノフによれば、ソフィア大聖堂の石造部は、ギリシア人職人の手になるものであり、ビザンツの影響が濃厚であると考えられてきた。だが、ソフィア大聖堂のような大規模で長期にわたる建築作業は、「到来したビザンツ人の力のみで成し遂げられることはありえなかった。彼らはロシアの生活、ロシアの生活習慣、ロシアの芸術上の好み、ロシアの依頼主の意志を非常に強く考慮しないわけにはいかなかった」(Брунов 1947: 92, 93)。

ブルノフのこの言葉に、民族の存在を不変のものと想定する、本質主義的な傾向があることは確かである。^{*14}だが、この言葉を排他主義の表れと解する必要もない。実際彼は、ノヴゴロドの回廊に見られる半円アーチを、「西欧のゴチック様式におけるアーク・ブータンの原型」とするようなロシア中心主義的な見解を、「(西欧跪拝という極端と並ぶ)別の側の極端」として一蹴している(Брунов 1947: 95)。ここではむしろ、「ロシアの生活習慣」という言葉に示されているように、日常生活への関心という視角が、「ロシア的なもの」の適及的な追求を支えていることの方が重要である。

ブルノフはさらに、日常生活への関心を導きの糸としてつづ、ソフィア大聖堂の変容を「対称性」から「自由性」への展開として論じている。彼によれば、一〇四五年にソフィア大聖堂の建設が開始されたときには、「整然たる内部の柱による、調和のとれた体系が、当初の建物の内装を、一段また二段の数多くの小空間に分割していた。それらの小空間は、上部に広がる中央の空間の周りにみごとにまとめられていた(……)。支配しているのは対称性であつた」。だが、一二世紀末までに、「大貴族の本造邸宅や都市民の家屋が拡張されるように、建物は拡張されていった(……)。日常生活と暮らしの必要性が、みずからの勢力圏に建物を引き込んだかのようにであつた」。ブルノフはこの状態を、

「多くの増築部に取り囲まれた、非対称的な建物群の自由で生き生きとした均衡」と呼ぶ。かくして、「整然たる対称性と、生彩ある自由性」という有機的に結びついた二つの原理が、ソフィア大聖堂の特徴である、そしてそれはまた、ロシア建築全般の特徴でもある、とブルノフは結論づけた (Брунов 1947: 104)。

ブルノフは、日常生活への関心を糸口としながら、「対称性と自由性」というロシア建築の二つの伝統を析出した。このうち、より重視されたのは後者である。^{*15} この「自由性」の重視という観点は、戦後の都市復興にも取り入れられた。ノヴゴロドやその他の都市の復興を論じたラヴロフ報告「ロシア都市建設の民族的伝統」を見よう。

建築アカデミーでこの報告テーマの指導者であったラヴロフは、「ロシアの民族的な都市建設の伝統の本質」を、「自由な『生彩ある』構成のための多様な方法」に見ていた。彼によれば、ロシア建築の古典主義時代（一八世紀後半～一九世紀初頭）の特徴は、ヨーロッパとは異なり「抽象的な幾何学主義」の克服が試みられたことにあった。最良の場合、ロシアでは規則的につくられた都市計画が、「地域の起伏の特性や、周囲の景観と有機的に結びつけ」られたのであった (Лавров 1947: 180; Веснин 1947: 12)。

地勢に対するこうした配慮が、空間的な個性性を重視することであるとすれば、ラヴロフはまた、時間的な個性性を

をも重視した。つまり、個々の都市の歴史に対する配慮である。ラヴロフによれば、都市復興計画には、空間と時間の個性性に対するそうした配慮が反映されねばならなかった (図3を参照せよ)。

「ノヴゴロドの歴史的中心は、クレムリンとそのユニークなソフィア大聖堂であったし、今後もそうであろう (……)。だが、歴史的中心とともに、現代ノヴゴロドの重要な建築物が立ち並ぶ新しい中心もなければならぬ。行政機関の建物や、演壇や、現在計画中の大祖国戦争の英雄のための巨大な記念碑が立ち並ぶ中央広場が、市の古い中核であるクレムリンの隣に構想されており、両者は構造上緊密に結ばれている。この統一が、同市復興の基本的な理念を象徴することになる。すなわち、歴史的に形成されたノヴゴロドの伝統と、新しいソヴィエト的な都市建設の理念との有機的な結合、継承性である」 (Лавров 1947: 185-186)。

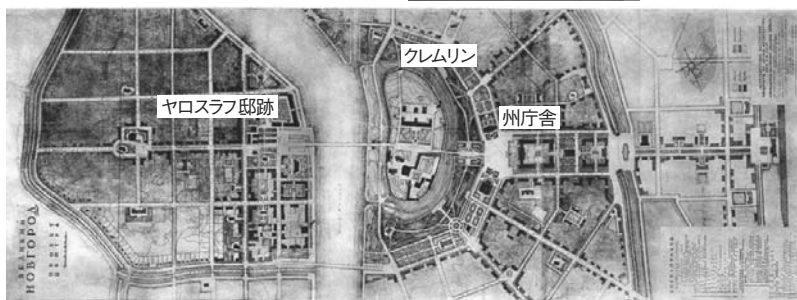
過去の建築物を現代の都市空間に取り込むという点では、ノヴゴロド復興計画には、過去の遺産を選択的に取り入れる社会主義リアリズムの特徴 (池田 2010) が表れていた。だが、ここではむしろ、ラヴロフの議論が、各都市の個性性に対する関心によって裏打ちされていたことを重



ヤロスラフ邸跡と交易所の拱廊（Новгородская 2000 より）



交易所の拱廊（今も修復が続く。2008年8月撮影）



クレムリン（奥に中央広場と州庁舎。Новгородская 2000 より）



州庁舎（2008年8月松本彰氏撮影）

図3 ノヴゴロド復興計画（ラヴロフ報告の附図）

視したい。実際、彼は次のようにも言っている。「個別的で、長年にわたり讃えられてきた特性を過去において有し、独自の『ノヴゴロド的』『プスコフ的』『ヴラジーミルの』『ヤロスラヴリの』などの相貌をもつ都市」にとつては、「ローカルな特徴」を探索することが、今日もなお「正しく、法則に適っている」のである（と）（Давров 1947: 189）。この、各都市の空間的・歴史的な個性性を重視しなければならぬという見解は、日常生活への関心というソヴィエト建築学の志向がたどりついた、ひとつの到達点であったといってもよいであろう。

III 北京への波及

スターリン時代のソ連建築学界は、建築における「民族的なもの」を一貫して探求した。そうした探求は、第二次大戦後の社会主義圏の拡大とともに、ソ連国境を越えて影響を及ぼすことになった。とくに中華人民共和国では、都市の近代化に対する要請が大きかっただけに、建築における過去の遺産とどう向き合うのが、真剣に論じられた。そうした模索の中心にいたのが、戦後中国における指導的建築家の一人、梁思成である。梁思成は、青年期にはモダニズムと中国の伝統建築を止揚することを目指し、戦後は

古都北京の保護に心血を注いだ。そうした彼の軌跡は、戦後の北京において、ソ連建築学の発展と交錯したのである（梁思成については王（2008）参照）。

新生中国の建築学界は、ソ連の強い影響下に置かれた。

とりわけ北京発展計画の策定では、ソ連から派遣された専門家が大きな発言力を有した。^{*16}だが、ソ連の専門家の見解は、必ずしも一貫していたわけではない。なぜなら、ソ連建築史が（何よりも首都モスクワにおいて）たどってきた諸階梯が、北京発展計画のさまざまな局面に個別に適用されたからである。そうした諸階梯とは、一九三〇年代初頭から半ばにかけての破壊、一九三〇年代半ばから末にかけての改造、そして一九三〇年代末から戦後にかけての「民族的なもの」の探求と過去の建築の保護である。

ソ連の専門家にとって、北京発展計画の基本は「改造」

であるべきであった。一九三〇年代後半のモスクワ改造が、その模範を提供した。これに対して梁思成は、北京の旧城を保護するために、旧城の外に行政中心区を新たに建設するよう主張した。だがこの見解は退けられ、旧城内に行政ビルの建築が開始された（王 2008: 98-122）。^{*17}のみならず北京改造は、城壁の「破壊」を伴った。このような動きに抗するために、梁思成がシチューセフによるノヴゴロド復興計画を引き合いに出したのは示唆的であった。「どのように『中国の博物館』である北京の都城を建設すれば

よいか……我々はノブゴロドを見習い、シチューセフから学ぼう」（王 2008: 130, 135）。破壊と改造というソ連建築学の初期の趨勢と、民族的伝統の探求というより後の趨勢が、第二次大戦後の北京で衝突していたのである。

他方でソ連の専門家は、新たにつくられる建物の様式においては、「民族的な形式」を強く推奨した。最も代表的な例は「大屋根」式建築、すなわち西洋風のビルの上に、四つの角が跳ね上がった中国式の屋根を乗せる建築である。元来モダンストとして出発した梁思成は、当初「大屋根」式建築を全面的に受け入れたわけではなかったが、ソ連専門家に影響され、この建築様式を強く支持するようになった（王 2008: 157, 182）。

この「大屋根」式建築は、民族的な様式を追求する点では、戦後ソ連における「高層建築」、いわゆるスターリン様式と通底していた。スターリン様式のシルエットは、建設されるべきソヴィエト宮殿のみならず、「太古のクレムリン、その寺院と塔の美しいシルエット」とも調和すべきとされていたのである。「高層建築のプロポーションとシルエットの（……）創造的な探求は、ロシアの建築遺産、その最良の都市建設の伝統の最も深い把握に基づいた、真の革新の道を目指すものであった」（Pydanenko 1953: 12, 14）。

だが、ソ連と中国の建築学界における「民族的なもの」の探求は、一九五三年のスターリンの死によって大きな方

向転換を余儀なくされた。一九五四年一月三〇日から二月七日にかけて開かれた全連邦建築技師会議において、党第一書記フルシチョフは建築計画の規格化と建設費の節約を提唱し、ソ連建築学界の現状を厳しく批判したのである。『ソ連建築』誌上では、「建築の外面的でパレード的な側面への没頭」が非難され、スターリン様式も「建築の外面に極度に没頭するあまり、その基本的・本質的な機能が犠牲にされている」と指摘された。ロシア古典主義の援用（たとえばポリャコフによるヴォルガ・ドン運河）でさえも、「復古主義と様式模倣」と評された（Важнейшие 1955: 3.5.6）。フルシチョフのこの新路線によって、ソ連の住環境が改善されたことは事実である。だが、ソ連時代の代表的な建築学者イコンニコフは、建築家に対して直接に圧力をかけるフルシチョフのやり方を「真のカタストロフ」と呼んだ（Глantz 2005: 99）。ソ連におけるこの転換は中国にも波及し、梁思成は復古主義者と難じられた（王 2008: 183-194）。

それでも、建築における「民族的なもの」の探求と歴史的建築の保護という、梁思成の基本的な姿勢は変わらなかった。一九五八年七月、都市の建設と改造をテーマとして、第五回国際建築家連合世界大会がモスクワで開かれると（Архитектура СССР 1958(10): 1）、梁思成は中華人民共和国建築家協会副会長としてそこに出席している。梁思

成が行った報告は「東アジアにおける都市の建設と改造」というもので、中国、北朝鮮、日本の事例に基づいて、人口の抑制やゾーニングなどの都市計画の諸問題を概観するものであった。「民族的なもの」の探求とは関わりがないように見えるその報告には、だが一箇所、異彩を放つ箇所があった。規格化の弊害とその克服について触れるなかで、彼はあえて一八世紀の「古い北京」を例に出したのである。「皇帝の宮殿から庶民のあらゆる家屋にいたるまで、すべての建物が定められた規格にしたがって建てられていた（……）。それにもかかわらず、醸し出される印象は生き生きとして多様なものである」（Лян Ся-Чен 1958: 15）。ここに見られる、伝統的な建築に対する関心、さらには生活空間に対する関心は、梁思成が一貫して抱き続けたものであった。同時にまた、スターリン時代のソ連建築学界における一貫した探求の軌跡も、そこには刻まれていたのである。

おわりに

スターリン時代のソ連建築学界では、「民族的なもの」の探求が一貫して行われ、次第にその対象範囲を広げていった。一九三〇年代末の段階では、そうした探求は主に

民族共和国のみを対象にしていた。だが、第二次大戦のなかで、ロシア建築の民族的な伝統に対する探求もまた深まった。さらに、ソ連「帝国」の勢力圏が拡大すると、そうした探求は中国にまで影響を及ぼした。

ソヴィエト建築学によるユーラシア規模での「民族的なもの」の探求は、日常生活に対する関心を絶えず導きの糸としていた。統治者の側から見れば、こうした関心は社会統合という目的と不可分であった。だが、ソヴィエト建築学における「民族的なもの」の探求、それに日常生活のあり方に関する考察には、決して統治者だけが関与していたわけではなかった。中央と地方の建築家や建築学者、さらには彼らが建てた建物に暮らし、それを日々眺めている無数の人々もまた、そうした探求や考察に参加していたのである。彼らが日々生活し、自分たちの生活について考える巨大な空間が、ユーラシアであった。

かくしてソヴィエト建築学とは、ユーラシアのさまざまな地域に生きる人々が、自分たちの歴史、文化、生活、それにお互いの関係をめぐって繰り広げる思索の総体に、具体的な姿を与える学知であった。博覧会という限定された空間に並ぶパヴィリオンであれ、都市復興のために描かれた構想図であれ、戦後の北京やモスクワに林立した高層ビルであれ、それらはすべて、ユーラシアの地政学を具象化していたのである。

●注

*1 本稿では、народの訳として基本的に「人民」をあてる。文脈によっては「民族」の語も用いるが、その場合は原語も記す。

*2 本稿では、национальныйの訳として「民族的」をあてる。

*3 一九三九年度の閉館は一〇月二五日。Правда (1939 Октябрь 26:2) 参照。

*4 博覧会の開会後も、アゼルバイジャンの西瓜や沿ヴォルガの野菜などが、収穫にあわせてパヴィリオンに輸送された。Правда (1939 Август 5:3) 参照。日常生活とパヴィリオンの展示物は、演出上は直結していたと考えてもよい。

*5 スターリン時代の政治における日常生活への関心は、革命・内戦期における生活空間全体の刷新という目標にまで遡る(池田 2007)。「民族的なもの」への関心と、日常的な道具に対する関心の結合という観点から、全連邦農業博覧会を同時代の日本の民俗学や民具研究と比較してみるのも興味深い。民俗学や民具研究については、竹中(2003) 参照。

*6 ネイション・ビルディングの定義は、池田(2007:8-9) 参照。

*7 ウクライナとベラルーシのパヴィリオンのデータは、Выставочные (2006:427, 433) 参照。

*8 全連邦農業博覧会の最中に第二次大戦が始まったことで、西部国境の守り手としてのベラルーシとウクライナの意義は、実戦のなかで確かめられることになった。この現実に対応して、一九四〇年五月に全連邦農業博覧会が再開されると、西部ベラルーシと西部ウクライナのソ連領への併合が、

両共和国のパヴィリオンの展示にくわえられた。カレロ＝フィン共和国パヴィリオンも新設された (Ципин 1940: 43, 46, 59)。

* 9 アルキンについては、Чиняков (1958) 参照。

* 10 一九三九年八月一六日には「ソ連の二つの国境地域」であるベラルーシと極東の代表団が、全連邦農業博覧会の軽演劇場で合同集会を開いている。Правда (1939 Август 17: 1) 参照。

* 11 第二次大戦後、一九五四年に全連邦農業博覧会が再開した際に、初めてR S F S Rパヴィリオンがつけられた (Castillo 1997: 112-113)。

* 12 一九三〇年代後半に帝政期の歴史・英雄・文化の復権が徐々に進んだ (Brandenberger 2002)。建築学界での対応する動きの一例として、独ソ戦開始直前に出たРязинин (1941) 参照。

* 13 一九四七年の時点でこの博物館は「組織化の段階」にあった (Музеи 1947: 323, 329; Москва 1980: 288, 438)。

* 14 ソ連の民族史研究における本質主義的な傾向について、宇山 (2005) 参照。

* 15 ブルノフとアルキンの共同報告は、ソフィア大聖堂の特徴として「生き生きとした自由さ」「構成の非対称性」を強調している (Аркин et al. 1947: 75)。戦後ソ連建築学における「自由性」「非対称性」の重視は、一九世紀のロシア絵画・文学が、自国の景観の「寂寞」のなかに、西欧とは異なる民族的なアイデンティティを見出そうとした (Ely 2002) ほど重なり合う。

* 16 アブラーモフのように、北京のみならず平壤の都市計画に深く関わった建築家もいた (Абрамов 1958)。

* 17 高村雅彦が言うように、そもそも支配者の象徴である中南海が北京中心部にある以上、行政中心区の移転という考えは、中国共産党指導部の受け入れるところとはなかったであろう (陣内ほか 1998: 229-230)。

●参考文献

- 池田嘉郎 (2007) 『革命ロシアの共和国とネイション』山川出版社。
池田嘉郎 (2009) 『スターリンのモスクワ改造』『年報都市史研究』一六号、三六一～五一頁。
池田嘉郎 (2010) 『モスクワ——社会主義の都市イデア』伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市——イデア』東京大学出版会、近刊。
宇山智彦 (2005) 『旧ソ連ムスリム地域における『民族史』の創造——その特殊性・近代性・普遍性』酒井啓子・白杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、五五～七八頁。
王軍 (2008) 『北京再造』多田麻美訳、中国書店。
陣内秀信・朱自煊・高村雅彦編 (1998) 『北京——都市空間を読む』鹿島出版会。
竹中均 (2003) 『郷土のもの／郷土のこと——民俗学・民藝・民具研究』『郷土』研究会編『郷土 表象と実践』嵯峨野書院、二〇四～二二五頁。
Абрамов, Л. (1958) Возрождение столицы КНДР - города Пхеньяна. Архитектура СССР 3, pp.49-51.
Аркин, Д. (1939) Архитектура выставки. Правда (Август 2).

- Аркин, Д. и Брунов, Н. (1947) О работах по истории русской архитектуры. *Основные* (1947), pp.67-89.
- Архитектура СССР
- Brandenberger, David (2002) *National Bolshevism: Stalinist Mass Culture and the Formation of Modern Russian National Identity, 1931-1956*. Cambridge, Harvard University Press.
- Брунов, Н.И. (1947) О последних исследованиях архитектуры Собора Софии в Новгороде. *Основные* (1947), pp.90-109.
- Castillo, Greg (1997) Peoples at an Exhibition: Soviet Architecture and the National Question. Thomas Lahusen and Evgeny Dobrenko (eds.), *Socialist Realism without Shores*. Durham, Duke University Press, pp.91-119.
- Чиняков, А. (1958) Д.Е.Аркин (некролог). *Архитектурное наследство* 10. Москва, Гос. Изд. литературы по строительству, архитектуре и строительным материалам, pp.206-208.
- Ely, Christopher (2002) *This Meager Nature. Landscape and National Identity in Imperial Russia*. Northern Illinois University Press, DeKalb.
- Лавинутиннов, И. (1939) Павильоны созюных и автономных республик. *Архитектура СССР* 10, pp.4-8.
- Города (1994) *Города России. Энциклопедия*. Москва, Большая Российская энциклопедия.
- Гропом, Јукка (2003) *Savign with Climbing: Common Lixity and the Ideals of the Good Life in Stalin's Russia*. Oxford, Berg.
- Hudson, Hugh D., Jr. (1994) *Blueprints and Blood: the Stalinization of Soviet Architecture, 1917-1937*. Princeton, Princeton University Press.
- Латур, Александр (2005). *Рождение метрополии. Москва 1930-1955. Изд. 2-е, доп.* Москва, Искусство-XXI век.
- Лавров, В.А. (1947) Национальные традиции русского градостроительства. *Основные* (1947), pp.178-192.
- Лян, Сы-Чен (1958). Строительство и реконструкция городов в Восточной Азии. *Архитектура СССР* 10, pp.11-15.
- Москва (1980) *Москва. Энциклопедия*. Москва, Советская энциклопедия.
- Музеи (1947) *Музеи и выставки Москвы. Путеводитель*. Москва, Московский рабочий.
- Новгородская (2000) *Новгородская область*. Москва, Вокруг света.
- Основные (1947) *Основные архитектурные проблемы пятилетнего плана научно-исследовательских работ. Материалы VII сессии Академии Архитектуры СССР*. Москва, Изд. Академии архитектуры СССР.
- Паперный, В. (1996) *Культура Дда*. Москва, Новое литературное обозрение.
- Правда*
- Рабинович, И. (1939) Архитектурные мотивы национальных павильонов. *Архитектура СССР* 10, pp. 9-13.
- Ротерс, Моника (2006). Советская родина как пространство

годы. Материалы и документы. Москва, Галарт.

Жуков, А.Ф. (1939) *Архитектура Всесоюзной сельскохозяйственной выставки 1939 года*. Изд. 2-е, исп. и доп. Москва, Изд-во Всесоюзной академии архитектуры.

(いけだ・よしろう／新潟国際情報大学情報文化学部)

городской архитектуры. *Ab Imperio* 2, pp.193-231.

Рубаненко, Б. (1953) Идеино-художественные основы архитектуры высотных зданий столицы. *Советская архитектура*. 4, Москва, Гос. Изд. литературы по строительству, архитектуре и строительным материалам, pp.11-27.

Рзянин, М.И. (1941) *Выставка Русская архитектура XI-XX вв. Каталог*. Москва, Государственное архитектурное изд. Академии архитектуры СССР.

Рзянин, М.И. (1947) *Русская архитектура*. Москва, Изд. Академии архитектуры СССР.

Ципин, Н.В. (1940) *Всесоюзная сельскохозяйственная выставка 1940 года*. Москва, Государственное издательство политической литературы.

Важнейшие (1955) Важнейшие задачи советской архитектуры. *Советская архитектура* 6, Гос. Изд. литературы по строительству, архитектуре и строительным материалам, pp.3-10.

Веснин, В.А. (1947) Основные научные проблемы пятилетнего плана научно-исследовательских работ Академии Архитектуры СССР на 1946-1950 годы. *Основные* (1947), pp.7-29.

Всесоюзная (1940) *Всесоюзная сельскохозяйственная выставка*.

Путеводитель по территории выставки. Москва, ОПИЗ «сельхозгиз».

Выставочные (2006) *Выставочные ансамбли СССР 1920-1930-е*